

## 藤尾と小野の一番勝負

Junko Higasa

『虞美人草』第十一章の博覧会場で、藤尾は自分の見知らぬ女性（小夜子）を連れて小野さんを見かける。「自分の所へは四、五日顔を見せないのに何という事かしら!!」目をそらして表面では平静を装っていたが、宗近君に『もう小野は帰ったよ、藤尾さん』と、心の動揺を見透かされてしまった。兄の欽吾には『驚くうちは<sup>たのしみ</sup>楽がある。女は仕合せなものだ』と嘲られた。藤尾のプライドは男二人に挟まれてズタズタである。これが藤尾という女に対する男二人の「鬪り」である。それが鬪りである証拠は第十二章のこの記述にある。『昨夕<sup>ゆうべ</sup>食卓で兄と宗近が妙な合言葉を使っていた。あの女と小野の関係を聞えよがしに、自分を焦らす料簡だろう』そこで藤尾は内心で宣戦布告する。『頭を下げて聞き出しては我が折れる。二人で寄ってたかって人を馬鹿にするつもりならそれでよい。二人が<sup>ぼのめか</sup>灰した事実の反証を挙げて鼻をあかしてやる』これはシェイクスピア作品上でクレオパトラが用いた法廷弁論的表現である。何故それが法廷的かということ「事実の反証」という裁判上の勝負を想起させる言葉を使っているからである。藤尾はこのように提訴する。『小野はどうしても<sup>あやまら</sup>詫せなければならぬ。つらく当たって詫せなければならぬ』『同時に兄と宗近も詫せなければならぬ』

さて、そんな状況が待ち構えていようとは思ってもよらぬ小野さんは、四、五日訪ねなかった弁明を考えながら甲野家の玄関へ近づきつつあった。その途中で折よく外出途上の欽吾に出会うが、有力情報を聞き出せないどころか、同日に博覧会に行ったという更なる不利情報を得る。小野さんは頭の中で自己弁護の材料を増やさなければならなくなった。そうして甲野家の部屋に通された小野さんは、無防備なまま藤尾との対面に臨んだ。ところが言葉で勝てるはずの詩人は『昨夕博覧会に御出に...』と先の言い回しを迷っている間に『ええ 行きました』とあっさり女王の威厳に先を越されてしまった。賢い小野さんは容易に白状しない。けれどついに「私もまた一さんに連れて行ってもらいます」と『藤尾は一さんという名前を妙に響かした』ところで『床に飾ったマジョリカの置時計が絶えざる対話をこの一句にちんと切った』この音は法廷で打つ木槌のようである。三角関係で揺さぶられた小野さんは30分間であっさり白状してしまう。この証言を引き出した藤尾は小野さんに勝った。『その夜の夢に藤尾は、驚くうちは<sup>たのしみ</sup>楽がある！女は仕合せなものだ！という<sup>あざけり</sup>嘲の鈴を聴かなかった』これは自分を鬪る男たちに「反証を挙げて法廷で勝った」という場面を暗示する女の勝利宣言である。女の藤尾は、男の詩人にも、哲学者にも、外交官候補にも勝ったのである。

さて、その30分間に小野さんが告白した内容は、章を飛ばして第十四章に記される。『藤尾には小夜子と自分の関係をいい切ってしまった』但し『あるとはいい切らない』「世話になった昔の人に付き添う影のような人」「5年を隔てて再会した霞のような関係」「鳥と魚との関係だにない」と言い切ったのである。恋愛関係のないのは事実だとしても結婚の話は隠している。隠蔽は罪である。小野さんは自分の嘘をどうしても実にしなければ無罪にはならない。この勝負は小野さんの敗北に終わった。(2013.12.11)